浜松南高新聞

発行所
県立浜松南高校新聞部
静岡県浜松市米津町
TEL(053)441－1486㈹
FAX(053)442－0148

印刷
富士印刷株式会社

原点に立ちかえって
波濤祭開かる

今年は「歴史」をテーマとして、波濤祭を行いました。各HR、クラブ展は今まで以上に盛り上がりをみせました。その結果を報告します。

〈大波濤賞〉36HR

〈波濤賞〉

最優秀賞	漫画研究
優秀賞	英語研究
3位	食物研究
4位	華の根同好会
5位	新聞部

〈HR展〉

1位	36HR
2位	14HR
3位	28・20HR

充実した体育館イベント

今年も体育館イベントは大好評だった。これまでとは違い、開会式後引き続き一年生音楽選択クラスの合唱、演劇部の公演が行われた。一年の演奏は一曲は自由もう一つは「大地讃頌」とすばらしかった。

しかし四クラスとも大地讃頌を歌うというのは客席も少しう〜んという具合だった。しかし新しい事を行うのに失敗はつきものなので、これからの生徒会の改善の努力に期待してみたいものだ。

あと演劇に関しては手に汗にぎる白熱の演技であった。途中数村先生や高田先生などの豪華ゲストの出演によっていっそうの盛り上がりだった。

そして、二日目の午後は有志バンドによるスーパーライブである。今年も最高潮に盛り上がり、特に最後のバンドの川島君の「僕たちのバンドの名は未完成なのでみんなの力を借りて完成させたいと思う。」という言葉はステージ発表、さらには波濤祭を表しているようで印象的だった。

ライブが終わるともう残すは閉会式の結果発表を残すばかり、クラスが一つになって行ったHR展、発表されるときは誰もが息をのむ、そして賞をとったクラスは喜び、とれないクラスはくやしがる毎年これは変わらない。みんなが一生懸命やった証拠だと思う。そしてこの体育館で始まった波濤祭は終わった。

KING OF波濤祭　36HR

やってミイラで大波濤賞

竹下綾祐

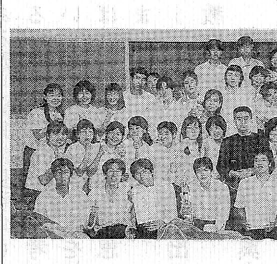
中間テストが終わり、僕達は本格的に波濤祭に向けて準備をし始めた。受験勉強をしたいという気持ちを押さえて、毎日6時まで活動したといっても、準備にとりかかっている時は部活をしている時のようにつらかった。波濤祭の当日になっても準備が終わらず、結局一日目は棒にふることになってしまった。この時点では波濤賞などとれるなど夢にも思わなかった。表彰の時僕達のクラスが発表され、喜びよりも驚きの気持ちが大きかった。

リーダーとして、36HRを優勝に導くことができたことを誇りに思う。

最善をつくそう

大波濤賞はナイルのたまもの

佐野文美



「大波濤賞、36HR」この言葉があまりにもそっけなく言われたので、初めは全く実感がなかった。でも、波濤祭に至るまで、何度も企画を練ったり、毎日準備をしてきたことを思うと、がんばったかいがあったと思う。

波濤祭の準備は、どのクラスよりも早くとりかかり、豊先生の的確かつ厳しいアドバイスの下で、みんなが協力してできたので「大波濤賞」がとれたのではないかと思う。

「大波濤賞」がとれたのも嬉しいけれど、クラスみんなで団結できたことによって得られた喜びの方が何倍も大きく感じられたと思う。

熱いステージ　有志バンド

今年で第三十三回を迎えた波濤祭、今年の有志バンドには以下の三つのバンドが参加した。

「服部」
佐藤友厚　中村敬
高橋圭一郎　小楠新

「Indecisives」
榊原俊伯　大石耕平
伊藤秀征　富田泰見
内山洋介

「未完成」
川島功　神谷直樹
小笠原敏充　藤田雅也
加藤勇輝

この三つのバンドがそれぞれの個性と日ごろの練習の成果を発表してくれた。会場にもバンド演奏を聞きに、多くの人が集まった。最初に演奏した「服部」は一番目ということで会場もまだ盛り上がっていない中での演奏で、すこし不利かと思われたが、各楽器のバランスのとれたすばらしい演奏で会場を沸かせた。

バンドの演奏を聞きに来た人たちに、感想を聞いてみたところ、「ギターがうまかった。」「ドラムがしっかりしていた。」「女性ボーカルが聞きたかった。」「昨年のようにスポットライトを当ててほしかった。」「自分もあのくらいうまくなるように練習したい。」「来年の有志バンドにも期待したい。」などの声があった。

演奏に関しては、全体的に完成度が高かったということだろう。実際にバンド演奏に参加した「Indecisives」の伊藤秀征君（35）に感想を聞いてみた。

「このような形で歌うのは初めてだったので、とても緊張して、うまくいくか心配でした。最初の一、二曲は頭の中が真っ白で、歌っている気がしなかったけど、曲間の拍手がうれしくて、実感が湧いてきました。メンバーも緊張してミスをしていたけど、歌詞のミスがなくてよかったと思います。僕たちにとって最後の波濤祭で演奏できてよかったです。」

と満足そうだった。今回の有志バンドは大成功を納めたと言っていいだろう。

生徒会長から見た波濤祭

六月の六日、七日の二日間に渡って行われた波濤祭について、生徒会長の石津圭子さんに話をして頂いた。以下その内容を報告する。

昨年と比較して

一年生もHR展に参加し、クラブも参加する所が増えて、より一層文化的になったと思います。

テーマについて

HR展のテーマを「歴史」として、各クラスに取り組んでもらいました。各クラスごとに様々な観点から「歴史」がつくられました。最初は「このテーマでは難しいのではないか」と思いましたが、そんな事もなく成功だったと思います。

空き缶壁画が無くなったことについて

中庭での水あめ、わた菓子も好評でした。一年生のHR展も予想よりはるかに良い出来でした。各芸術クラスでの制作物も良かったと思います。

〝名物〟と呼ばれるものがなくなったことに関しては、新しいものを考えたいですが、今年の形は失敗ではなかったと思います。

感想

昨年の十二月から、約半年の間準備をしてきました。波濤祭に関しての仕事だけでなく、通常の生徒会活動もありました。その他にもHR、クラブの活動もありました。毎日夜遅くまで学校に残って仕事をしました。誰もが成功を目指して、一生懸命でした。終わってみて、反省するべき点は多々ありますが、この仕事をやれて良かったと思っています。今年の波濤祭が、来年以降のためのSTEPになってくれることを願います。

以上がインタビューの内容だ。皆さんはどう考えるだろうか。

大仕事を終えて

波濤祭とは、南高で最も人気のある行事であり、一番南高が活気に満ちている日である。その大イベントを、生徒会に入って初めての仕事としてまかせられたら、とても幸運なことである。その幸せ者を、文化委員長の松岡相吾はやってしまった。「正直いってとっても大変でした。」と記した彼の言葉は、何かとても充実感と満足感にあふれているように感じた。

今回の波濤祭のテーマは「歴史」。彼の言うには、「歴史というのは、今まであるものとこれからつくっていくものと、二つのとり方があります。その中でも今回は今一度「文化」というものを見直し振り返るという捉え方をしました。今回のテーマでみなさんもいろいろな歴史を考えたと思います。そうしていくうちに新たな歴史がつくられていくわけです。」とのこと。人によって歴史というと決まったイメージがあるが、このテーマをきっかけにしていろいろ考えてみるのもよいことだと思う。

空き缶壁画のことについては、「なくなったわけではなく、一時的に中止しているだけ。」とか。空き缶壁画の中止により中庭でのイベントが増えるだろうことを期待している。

「僕の感想は今のみなさんの気持ちと同じです。みなさんがよかったと思えばよかったことになるし、その逆もまた、です。昨年の波濤祭での反省点を改善することができたと思いますが、今年も反省点はあり、来年はがんばってまた改善していってもらいたいです。来年も何らかの形で参加したいと思います。」

南高生として、最高の波濤祭をむかえるように、生徒一人一人が、今年の反省を生かし、来年も新たなものを創造していきたいものだ。

新任紹介

①担当教科　②前任校　③趣味・特技
④南高の印象　⑤チャームポイント
⑥今、一番気になること

大澤正昭 校長先生

①国語
②天竜林業高等学校
③絵画
④堅実・着実
⑤チャームレスポイント(?)ならいくつも
⑥日本語の心が大切にされなくなっていること

岡野國雄 教頭先生

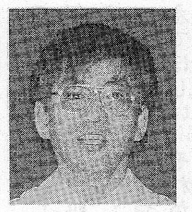
①数学
②浜松工業高校
③ドライブと山野草の写真
④学校全体が静かで落ち着いている
⑤特にない
⑥教室での授業で、元気がないこと。自分の今したいこと、好きなことに熱くなろう

永井豪 先生

①国語
②浜松湖南高校
③写真（民俗行事）
④おとなしくまじめ
⑤分からない
⑥若者たちのこだわりの無さ

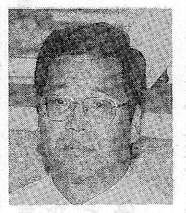
篠村晶子 先生

①英語
②浜松商業高等学校
③歩くこと・呼吸をすること
④環境の良い所にある
⑤手つかずの天然眉（因みに、前任校でのクラスの生徒はサムラーでした）
⑥日本人の天下泰平意識



加藤国雄 先生

①理科
②横須賀高等学校
③ギターを少しだけ、珠算2級
④生徒が素直で真面目
⑤考えても見つからない
⑥生徒が勉強の中に面白さを発見できるかどうかということ

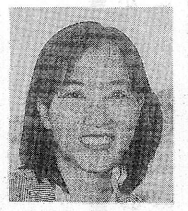


森部明 先生

①英語
②浜松湖南高校
③最近は少しずつ碁を勉強しようと思っています。
④生徒の質がよく、素直な印象を受けました。（校舎や施設は、さすがに古さを感じます）
⑤チャームポイントをアピールするような年齢ではありません。
⑥ひとつ挙げれば、やっぱり地震のことでしょうか。

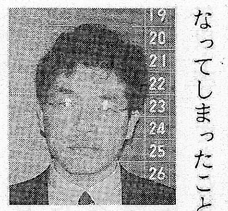
太田清子 先生

①家庭科
②二俣高校
③書道・琴
④一見しっかりしている生徒ばかりだが…。
⑤何に対しても諦めないこと
⑥特にありません



長嶋久美 先生

①数学
②清水東高校
③なし
④真面目・おとなしい
⑤なし
⑥通勤時間が以前より長くなり、子供と遊ぶ時間が少なくなってしまったこと。



宮地和也 先生

①国語
②佐久間高校
③読書・スキー
④風が強い
⑤無口で控え目な所?
⑥今年の冬はちゃんと雪が降るかということ

岡田多恵 先生

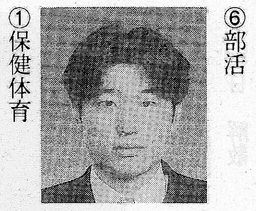
①国語
②川根高校
③旅行、音楽、買いもの、読書、ジョギング、パーティー
④女性が活発だという意味で現代社会の縮図であると感じた。女性特有の長所を伸ばしていけると、もっと良い学校になるのではないか。
⑤安定感のある下半身
⑥北朝鮮のこと。戦争になったらどうしよう。

池谷まさ子 先生

①理科
②浜松北高校
③旅行
④中庭の花がきれい
⑤なし
⑥道路が混むこと

本間宣資 先生

①保健体育
②新卒・中京大学
③スポーツ全般・映画鑑賞
④良い子ばかり、おとなしい
⑤特にないと思う
⑥部活



浅井恒志 先生

①保健体育
②新居高等学校
③スポーツ全般・水泳・スノーボード
④部活動が盛んな印象を受けました。
⑤特になし
⑥なし

栗田博 先生

①数学
②新居高校
③特にないが、昭和45年に目の病気で入院中ラジオから流れてる音楽がカーペンターズのイエスタディ・ワンス・モアです。今でもこれを聞くのが好きです。
④授業中に寝たふりをする生徒が多いように思います。
⑤不明
⑥信号が赤であったので私は青になるのを待っていたら後から南高の生徒が来て赤でも平気で横断していきました。ちょっと気になります。

田島裕子 先生

①保健体育
②県立吉田高校
③おかし作り・ドライブ・スポーツ観戦など
④明るく、元気な生徒
⑤まつげ(?!)は長いカナ(?!)
⑥水泳部のこと

部活動報告

●野球部
春季西部大会
三回戦 10－3天竜林業
準々決勝 0－7掛川西
西部六位

●サッカー部
インターハイ西部大会
準決勝 1－1聖隷学園
PK戦2－3
3位決定戦1－0磐田東
インターハイ県大会
一回戦 7－0御殿場南
二回戦 5－0沼津東
準々決勝1－1静岡学園
PK戦2－4

●男子バスケット部
インターハイ西部大会
一回戦 90－70浜松東
二回戦 71－74池新田

●女子バスケット部
インターハイ西部大会
一回戦 135－17森
二回戦 75－44袋井
三回戦 53－55浜松市立
七位決定戦46－80浜松商業
インターハイ県大会
一回戦 56－57富士宮北

●男子テニス部
インターハイ県大会
二回戦 2－0稲取
三回戦 2－0修善寺工
四回戦 2－0庵原
準々決勝2－1静岡市立
準決勝 0－3日大三島
ダブルス
一回戦 名倉・太田6－1
　　　 城下・太田7－6
二回戦 名倉・太田1－6
　　　 城下・太田3－6
シングルス
一回戦 名倉0－6
　　　 太田1－6
二回戦 城下6－2
三回戦 城下3－0
準々決勝城下0－2
五・六位決定 城下6－7
インターハイ東海大会
一回戦 城下6－1
二回戦 城下1－6

●女子テニス部
インターハイ県大会
二回戦 3－0富士宮北
三回戦 3－0袋井
四回戦 1－2沼津学園
守山・浦川ベスト16

●男子バレー部
インターハイ西部大会
一回戦 2－1磐田南
二回戦 0－2聖隷
インターハイ県大会
一回戦 0－2藤枝東

●女子バレー部
インターハイ西部大会
二回戦 1－2磐田東

●剣道部
男子一回戦 2－2袋井
二回戦 2－3引佐（代表戦勝ち）
女子二回戦 1－1掛川西（代表戦負け）
個人戦
中村友也15位県大会へ

●男子ソフト部
インターハイ県大会
一回戦 5－7星陵

●女子ソフト部
インターハイ西部大会
一回戦 1－25誠心

●水泳部
インターハイ西部大会
四百M自由形2位 忠内
百M自由形8位 鈴木
百M平泳ぎ9位 坂下
百Mバタフライ5位 松島
二百M個人メ4位 松島
四百M個人メ9位 中村
　　　　　11位 豊田
四百Mリレー 9位
四百Mメドレーリレー7位
八百Mリレー 7位
インターハイ県大会
四百M自由形1位 忠内
一五百M自由形2位 忠内
東海大会進出

●柔道部
インターハイ西部大会
個人戦 71kg級 大石
準決勝 優勢勝
決勝 優勢負 準優勝
インターハイ県大会
二回戦 1－2静岡市立

●陸上部
インターハイ西部大会
百十MH 阿部 3位
百M 水谷 5位
三千MSC藤田 2位
五千M 藤田 5位
八百M 青島 9位
インターハイ県大会
百M 水谷 6位
百十MH 阿部 5位
三千MSC藤田 6位
インターハイ東海大会
百十MH 阿部 7位
三千MSC藤田 16位
百M 水谷 予選出場

●卓球部
インターハイ西部大会
男子 1－3掛川西
女子 3－1袋井
　　 1－3浜松北
　　 3－2小笠
　　 0－3浜北西

●男子ハンドボール部
インターハイ県大会
一回戦 21－13吉原
二回戦 17－19静岡東

●女子ハンドボール部
インターハイ県大会
一回戦 9－18沼津西

●将棋部
西部大会 個人戦Bクラス
　勾坂 ベスト8
　平原 ベスト16

校内トピックス

齋藤先生ご結婚
岡田先生に

去る六月十四日、国語科の齋藤多恵先生が結婚された。お相手は、大学時代の先輩で10年間くどき続かれてついに結婚することになったそうだ。

結婚式は、浜松市内のホテルで行われた。二人はバレーボールのサークルで知り合ったこともあって、式では二人のサークルでの一コマをおり込んだ寸劇も行われ、とてもにぎやかだったそうだ。

結婚して変わったことは、早起きになったこと、また社会人としての責任がでてきて大人になったような気がすることで、将来、子供は三人欲しいということだ。

先生から生徒へのひとこと。

「結婚したからうるさくなったり、おしゃれになったり、幸せそうに見えるなど、みんな結婚に結びつけないでほしいと思っています。」

最後に、結婚とは何かと尋ねた。

『結婚とは、生き方を決めることのひとつである。』

末永くお幸せに……。

春季遠足

二年生

四月二十三日（水）に春季遠足が実施された。前日に雨が降ったため予定されていた目的地を多少変更しなければならなかったクラスもでてきたが、当日は無事晴天となりさわやかな遠足となった。各々の目的地へは、クラス単位でバスで移動した。なかには、約二時間半もの時をバスで過ごしたクラスがあったようだが、その時間を、『友達とトランプをしたり、カラオケをするなどしてとても楽しかった。』と言う人も少なくないのではないだろうか。

目的地は、五コースに分かれ、21HRは、パルパル遊園地と新居イチゴ刈り園へ、22・24・25・26HRは、長島スパーランドへ、23HRは、東海大学海洋博物館へ、27・29HRは、名古屋科学館へ、28・20HRは、名古屋港水族館に行った。

名古屋科学館では、「みて、ふれて、たしかめて。」をテーマとして、いろいろな工夫がこらしてある展示品を自分からすすんでためしてみることで、科学のおもしろさを二倍にも三倍にもふくらめ科学にたいする関心をふかめることができた。展示品には、生命と地球について考える〈生命館〉、未知の世界・宇宙をのぞく〈天文館〉ここではプラネタリウムが開演され、月ごとの星座や宇宙などの話も聞くことができた。それと、機械のしくみなどを学ぶ〈理工館〉があった。それぞれの階には館内展示品の実演が約20分あり好奇心いっぱいに、科学の楽しさを感じることができた。

三年生

4月23日（水）春の遠足が行われ、各クラスで事前に決定した目的地へとそれぞれ出かけた。

31・33・38・30HRはナガシマスパーランドへ、32HRは日本平動物園へ、34HRは東山動物園へ、35HRは白糸の滝・まかいの牧場へ、36・37・39HRはフルーツパークへと向かった。

ナガシマスパーランドは、本校でも八クラスが目的地に向かい、各々、自由行動へと移った。遠足シーズンということで、中学生・小学生と思われる生徒と一緒であり、平日であるにもかかわらず、ナガシマスパーランドは大盛況であった。

フルーツパークへは、九時三十分ごろ出発し十時ごろには到着したため広大な自然の中で、のんびりとした時間をすごすことができた。

園内には様々な種類の果物の木が立ち並び、中には今まで自分の目で見たことのなかった果物の木もあった。

フルーツパーク内の果物は見るだけで取って食べることができなかったが、そのかわりに園内の売店で様々な種類のフルーツの入ったアイスクリームが売られていた。

フルーツパークには予定よりも早く到着したので園内をすべて見て回っても時間が余ってしまったので時間をつぶすのに困った。市内の見慣れた景色を見ながら目的地に着いたため遠足に行ったという実感がなかったのは残念。

今年の遠足はコースによって費用に大きな差が出た。遠くに行き、費用を多くかければ楽しみが大きいというわけではないが、やはりフルーツパークで高校生が一日過ごすのには難があった。

上善は水の如し

人を語る

今回は大澤正昭校長先生の登場です。お忙しい中、快くインタビューに応じてくださいました。

―南高の生徒の印象はどうでしたか。

真面目で堅実で何事にもひたむきに努力するところがとてもすばらしい。少し気になる所としては、内気な生徒が多いのではないか。やや他力本願で、人に頼りすぎる所があるという印象を受けます。しかし、長所と短所は表と裏の関係で、見方によっては短所であるが、同時に長所でもあるのだから、プラス思考でいい方にとらえ、それを伸ばしていく方がいいと思います。

―担当教科とその思い出を教えてください。

国語担当で、特に古典を教えるのが好きでした。古典を学ぶということは、先人の創り上げたすばらしい文化遺産に触れ過去のすぐれた人々と会話を交わすことだと私自身思っていたし、それを生徒にも教え、伝えたかった。古典の中に出てくる人々は、それぞれに魅力的で、その当時の人の考え方や生き方を語ってくれます。また、歴史や文化のすばらしさを味わうことができます。そんな授業を目指したつもりですが。果たしてそのとおりにいったかどうか。

―南高の生徒に言いたい事は何ですか。

大澤正昭
校長先生

私の好きな言葉の一つに、ヘレン・ケラーの「希望は人を成功に導く信仰である。希望がなければ何事も成功しない」というのがあります。希望を持って努力すれば、必ず成功する。希望を持つことは、信仰と同じように自分の支えにもなるし、生きがいにもなる。ぜひ希望という信仰を持ってほしい。

もう一つ、高校時代は、多感で感受性が強いから、ちょっとしたことで悩んだり劣等感を抱いたり、時には自己嫌悪のあまり、どうせ自分はだめだ、何をやってもうまくいかないなどという状態に陥ったりすることもあるでしょう。しかし、人には必ずそれぞれの中に、自分だけの宝物がある。それを見つけて、一生懸命掘りだしてほしい。ない宝を求めないで、ある宝を掘り出すことが大切です。

―今までどんな部活動の顧問をされたのですか。

私が人並みにできるものは絵を書くことです。いろいろな学校で美術部の顧問をしました。絵は最も簡単な自己表現の一つだと思います。今は描く余裕がありませんが、できれば、来年の波濤祭の職員展に出してみたいと思っています。他にバレーボール部の顧問もしたことがあります。確かに普段の練習の時や試合に臨む時は、勝つことだけが目標でした。しかし、それに向かって努力する中で、チームワークを大切にすることや苦しさに負けない心など、人間として大切なものを結果として部員達に教えていたかなと思います。

―はじめて校長先生になった時、どのように感じましたか。

いろいろな観点から、果たして自分が本当にふさわしい人間であるか考えました。また、責任の重さや緊張感で身の引きしまる思いでした。不安がないといったらうそになります。

「上善は水の如し」という老子の言葉があります。最上の善は水のようなものという意味です。水は万物に利益を与えていながら、円い器に入れれば円くなり、四角な器に入れれば四角くなって、他と争わない。また、人のいやがる低い所に身を置いている。このような内容です。こんな誠実で謙虚な生き方ができればと思いますが、凡人の私にはほど遠い感じです。私は、この言葉を座右の銘にしています。

最高のにぎわい　浜松祭

五月三日から浜松の人々が待ちに待った「浜松まつり」がにぎやかに開催された。今年は参加町が増え過去最高の百六十四町で盛り上がった。

三日は、朝から雨が降ったりやんだりのあいにくの天気のため、市中心部での御殿屋台の引き回しは中止になったが、凧揚げ会場ではいくつかの町が雨に負けじと、凧揚げをし、威勢のよい掛け声を響かせていた。夜は雨がやんだため、各町では子供の誕生を祝う若衆らの練りで盛り上がり、初日から激しかった。

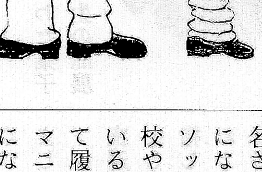
四日の午前、初日の雨のうっぷんを晴らすかのように、初凧が次々と大空を舞った。糸切り合戦はわずかしか行わなかったが、それでもラッパと掛け声が響き、凧の糸が激しく絡み合って観客を沸かせた。夜は市内中心部で各町自慢の屋台の引き回しが行われた。おはやしと豪華な屋台の造りが繁華街をお祭りムード一色になった。

五日、浜松祭りの最終日だけあって夕方まで中田島町の凧揚げ会場はものすごい人と凧揚げ合戦、糸切り合戦とラッパの音で最高ににぎわった。そして夕方から、各町が市内中心部に集まり合同の練りが激しく行われた。ラッパと練りの掛け声で最後の盛り上がりを見せた。

今年は浜松祭りの次の日、休みではなかったので参加した筆者もかなりつらかった。

ルーズソックスを考える

最近、これでもかというほどスカートをまくり上げ（としか思えない）、いまにも地面にひきずりそうなほどのルーズソックスを履き、化粧をぬりたくって我がもの顔で街を歩く高校生の姿を見るのも日常茶飯事となった。今回は、こんな高校生の重要アイテムの一つ、ルーズソックスに的を絞ってみることにした。プリクラ、PHS、ポケベル、タマゴッチと、数えあげればきりがないほどのブームの中でも普及率NO1は、このルーズソックスといっても過言ではないだろう。雑貨屋などに行けば定価約千五百円で、これをとめるソックタッチは四百円位と手軽な値段で手に入る。タマゴッチについては、流行に便乗して○○ッチという数多くの類似商品が販売され一時の猛烈なブームを緩和できるものとも思われたが、タマゴッチの予約は減るどころか増える一方だったという。しかし、ルーズソックスについては、各種の製品が共存し、高校生に定着した人気を誇っている。



このルーズソックス、元来、糸がしっかりと入った少し大きめのぶ厚いくつ下だったのだが、ある東京の女子高生が糸を引っ張り出して履いているのをメーカーが見つけ、売り出したところ大当たりで、スーパールーズソックスと命名され、世間に出まわるようになったという。またルーズソックスを履く男子も他の学校や南高内の一部で見られている。この人達は、履きたくて履いているのか、そちらのマニアの人なのかは、明らかになっていない。

このように今になってこの話題を取りあげるのもなんだが、知りたくても聞けないこのなぞは、男子代表として是非とも調べてみたい魅力あるネタであった。

校則の変遷

新聞記事から考える

今年の波濤祭も例年通りすばらしい盛り上がりを見せ幕を閉じた。ところで今年の波濤のテーマは「歴史」ということで私たち新聞部はこのテーマにヒントを得て、校則に対してよく「もっと個性を尊重すべき」という声をよく耳にするので「校則」の変遷について調べてみた。一つは南高の学帽の変遷についてであり、南高にも学帽というものがあったのか、と驚いた。二つ目は京都のある高校の制服についてであり、この高校は近年制服について新しい方針を打ち出しそれが問題となっているそうだ。二つともおもしろい記事なのでぜひ読んでほしい。

学帽の廃止　過去の南高新聞より

皆さんの中には、知っている人より知らない人の方が多いと思うが、本校では、二十年程前は学帽をかぶって登下校することが規則となっていた。そして着帽の自由化について、当時二年以上問題となり生徒と生徒会、生徒会と教師の議論を経て、結局のところ学帽は廃止され今に至っている。さて、どのようにして廃止に至ったのだろうか。

……昭和四十五年当時、浜松北高校では「生徒会が着帽の自由化を認め、校長に許可を求めている」という段階に入っていた。その頃南高は、北高の影響か、それとは関係ないのか三年生が、ちらほらと無帽で登下校しているのが目につくようになっていた。それに対して一、二年生は比較的としっかりとかぶっている。

その理由を聞いてみると、上級生が恐いから・習慣だからなどということである。

各クラスや、風紀委員会で何度も話し合いが持たれたようであり、必要だと考える生徒の理由としては、学生らしい・不良化を防ぐ（長髪がなくなるから）・男らしい・学校の象徴・日射病を防ぐというものだった。

これに対し、帽子はただ形式だけで、必要はない・夏は暑い・髪にあとがつくなどの反対意見が出された。

実は、同じことを昭和四十五年以前にも考えた人がいたらしく着帽自由化署名運動というのを実行した記録が残されている。

しかし昭和四十五年の時に、依然として着帽の自由化運動が行われていたということは、その時は運動が盛り上がらなかったのか、あるいは署名が集まったにもかかわらず却下されたのだろうか。

昭和四十五年には、〃自由化では上級生に無理矢理かぶせられるから廃止にしてほしい〃という一、二年生の強い意見があったり、〃廃止では、かぶりたい人に不満が残る〃や、〃現在の状態で良い〃など反発も多くその時に結論は出せなかった。

その後、学帽廃止についての記事は見られなくなる。生徒自身が興味を失っていったのか、どのような経緯で廃止が決定したのかは不明である。

京都に桂高校という学校がある。この学校では今まで生徒はずっと私服通学をしていた。ところが、今年度の新入生から制服を着用しなくてはいけないと昨年末に発表があった。入学式を迎え、会場はほとんどがグレーのブレザー姿であった。先輩たちが二十年以上守ってきた私服の伝統を受け継いだ新入生はわずか十二人だった。（四月六日中日新聞朝刊による）

このことについて、制服が導入されるには、何らかの理由があったはずである。しかし、生徒会で反対決議がされ、生徒が説明や話し合いを求めてきたのにもかかわらず、その機会は持たれなかったようだ。これでは、生徒からは納得できないのではないか。生徒たちは「一方的な制服導入は、子どもの権利条約違反。条約が保障している子供の意見表明権を無視している」とする報告書をつくり、国連子どもの権利委員会に提出するということだ。

もう一つ感じたことは、在校生が反発するのはごく自然なことだと思うが、新入生が反発するのは少しおかしいということだ。なぜなら新入生が入学試験を受けたときにはすでに分かっていたはずだから、もし制服を着るのがいやならこの学校を受けなければよかったのではないか。

新しい規則を作る時に必要なものは意見を十分出してそれについて話し合うことだと思う。桂高校の場合、相互理解の不足が問題を大きくしたようだ。

論説

マスコミと神戸事件

少年が殺害され、その頭部が中学校の正門前におかれる。神戸の男児殺害事件は今まで漫画かホラー映画の中でしか起こり得なかった信じ難い事件だった。

しかも、逮捕された容疑者が中学生だったという事は、さらに社会を驚愕させた。そしてこの事件の持つあまりにセンセーショナルな面は、ニーズを最重要視するマスコミの格好のえじきとなり、連日様々な取りあげられ方をしている。

このマスコミの〃暴走〃は容疑者が逮捕される前から始まっていた。

まず、目撃情報をもとにした犯人推理合戦が行われた。それは、どんどんエスカレートして根拠のない似顔絵をのせる夕刊紙まで出る始末だ。とても犯人逮捕の役に立つと真面目に考えたとは思えない。

容疑者の中学生が逮捕されると、今度はこの中学生の身辺を過剰に取材するようになった。社会的正義などという大義名分を振りかざし、その少年の顔写真を掲載する週刊紙まで出た。いったいその行為で誰が救われ、事件の真の解決への何の手助けになると言うのだろう。所詮、本音は売り上げの事のみを考えた結果ではないのだろうか。マスコミには、少なくとも容疑者の周りの人間を傷つける権利などない。

そして、最近さかんに取り上げられているのが少年法に関しての問題だ。現在の少年法では、この少年が刑事処分を受ける事はない。それが甘すぎるとして、少年法改正が声高に叫ばれるようになってきている。

しかし、頭を冷やして考えてほしい。それが真にこの事件を解決させる事になるだろうか。そこには、少年を社会から隔離してしまえば良いという安易な発想が見え隠れする。それでは、この事件の真の解決法とは到底思えない。この少年をどんなに隔離しようと、いつかは社会へ戻ってくる。誰かの隣で暮らす事になるのだ。少年が、罪をつぐないながらも、新しい人生を生きる可能性をさぐり、手助けをする事こそ、真の解決法ではないだろうか。

今回の事件は、確かに邪悪な信じ難い事件だった。だがこの事件をおこしたのは悪魔でもなんでもない人間なのだ。マスコミも一時の感情で、少年法改正を唱えるのではなく、この少年が変わるために、何が必要で、何が求められるべきかを、報道していってもらいたい。

You'll never walk alone.

四月二十七日（日）にはまホールで南高吹奏楽部の第四回定期演奏会が行われた。

第一部は、クラシックステージで、大会で好成績を修めた曲を含む全四曲が演奏された。

第二部は、他校の演奏会にはない南高ならではの新しい試みとして、各パートごとのステージであった。劇あり歌あり手作り衣装あり笑いありの楽しいステージが繰り広げられた。

第三部は、おなじみの歌謡曲などによるポピュラーステージで締めくくった。三年生はこの演奏会で引退することもあって、二年生からの秘密のプレゼントの〃想い出がいっぱい〃という歌が贈られた。ここでステージは、最高潮に達し、感動のうちに幕を閉じた。

今回の演奏会は、見せ所が多く、観客は楽しい時を過ごしたに違いない。次回の演奏会にも期待したい。

最後に部長の杉浦秀典君（39）より、「吹奏楽を続けていて本当に良かったと思いました。」

期待を胸に、アメリカへ出発

第五回全国高校生国際交流プログラムに、本校の26HRの寺田美知子さんが全国で五十八名の中の一人に選ばれた。

このプログラムの目的は、日本国内の高等学校に在学する高校生を米国へ派遣し、アメリカの高校生との共同生活を通して日米両国の高校生が相互の理解と親善を深め、同時に日米の相互理解と友好親善に寄与するためである。

その日程は次の通りである。

7月18〜21日　事前合宿
21日　米国へ出発
22〜26日　ワシントン見学
27〜30日　ニューヨーク見学
30〜8月8日　プリンストン大学で米高校生と合宿
9日　日本へ出発
10日　帰国（成田で一泊）
11日　解散

寺田さんに、インタビューをしてみた。

―選考試験はどういうものでしたか。

一次試験が日本語での作文と英語のディクテーションで二次試験は、面接とグループ実習をしました。面接は日本語と英語で、グループ実習は日本語でやりました。

―向こうでは何をしたいと思いますか。

アメリカの歴史的な建物とかを見たり、いろんな人と話をしたりして、日本以外の国の雰囲気を十分に味わってみたい。このプログラムを通して、もっと自分の視野を広げたいと思う。